讀賣新聞

THE YOMIURI SHIMBUN

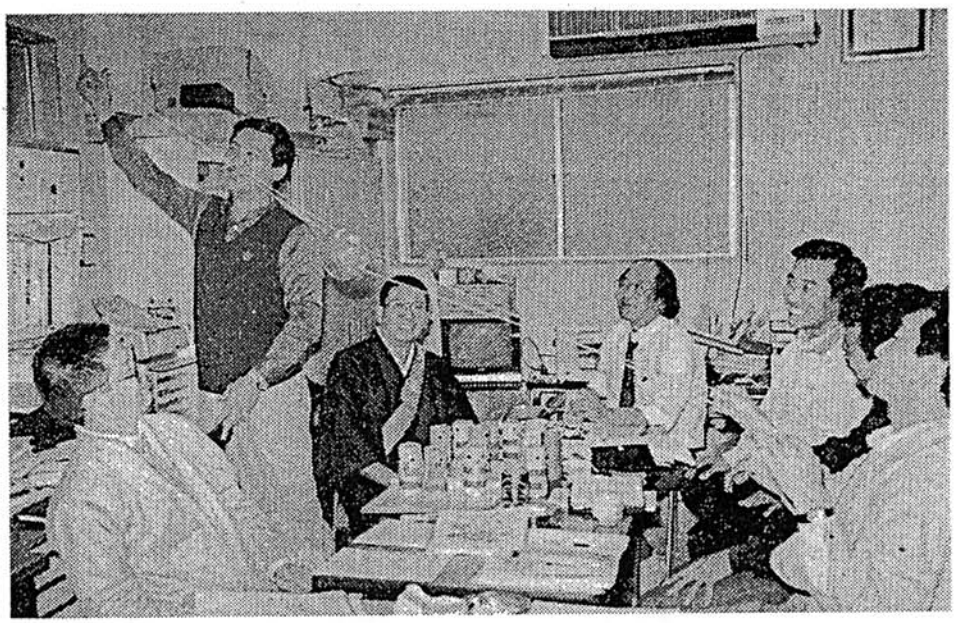
10月20日 木曜日
1988年(昭和63年)

第40360号 (旧刊) ©読売新聞社1988年

発行所
読売新聞社
東京都千代田区大手町1-7-1
郵便番号100-55
電話(03)242-1111
郵便振替口座東京4-612

保育園経営のプロ集団「八王子研究会」

保育にかける男たち
ユニークな試み着々



現場の経験から考案した「手作りおもちゃ」を検討する八王子保育研究会のメンバー

とかく保母さんやママたち中心の保育の世界で、男性ばかりで構成される保育研究グループが気を吐いている。地域の保育園経営者でいずれも三十代。現場の経験を生かした手作りおもちゃや保育用語辞典の作製などを引っ提げて、近く「全国保育研究会」へも黒一点、研究発表参加の予定だ。保育にかける〝青年〟メンバー、ただ今、十一人。

このグループは「八王子保育研究会」。東京の西部、ベッドタウンとして人口増加の続く八王子市には五十四もの私立保育園があるが、メンバーはいずれも園長や副園長という立場。多くが二代目で、中には三代目もいる。

発足は三年前。「女性、あるいは五十代以上の男性の中で、横のつながりがない。いっそ同年代の男だけでも、と旗揚げしまして。当初は九人でした」。リーダー格の藤森平司さん(三九)はいう。

集まってみると、女性中心の職場で気を使うこと、母親たちが過剰な育児情報の中で混乱していること、など共通の話題や悩みが多く、たちまち意気投合。加えて何よりも「みんな教育免許持ってたり実際に教壇に立った経験があったりで、子育てについて、そりゃあ熱心。話はすぐ、自分たちでできることは何かっていう方向に向かいましたね」(藤森さん)

手作りおもちゃ
用語辞典を作製
全国研究集会で成果発表へ

テーマは一貫して「保育を地域全体のものに」。現在保育園が行っている保育のノウハウを公開し、一般の子育てのヒントにしてもらうと同時に、さらに突っこんで社会にとって保育とは何かを考えてもらおう、というねらいだ。

「今、栄養士がついてきちんと現場で用意している給食とか、時間延長の際も保母さんのケアを確立している状態とか、保育園はなかなか頑張ってる、と思いますよ」という自信あっての提案でもある。

具体的には一昨年から三回にわたり、市民ホールの催事場を借りて「乳幼児の世界」展を開催。「子供の目の高さから生活を見たら」と、低位置から撮影した日常生活のビデオを放映したり、保育園で子供たちに簡単な絵を見せた際の言葉の反応を採取して紹介、言葉の発達段階を解説したり。父母を対象に子供を含む家族の食事のとり方のアンケートなども実施してきた。

今年五月、これらの実績を手に「東京都保育研究大会」に参加、発表したところたいへんな好評。「女性と全く違った研究の発想」「ダイナミックな実行力」をかわれて代表となり、七月には関東ブロック研究会へ。各地の代表から「若いあなたたちこそ次代を担って」と励まされ、十一月に開かれる全国大会に送り出されることに。

今、同会は全国大会にひき続き十二月に予定されている第四回の「乳幼児の世界」展の準備に大わらわだ。今回の目玉は、今までずっと続けてきたゼロ歳児から二歳児のための手作りおもちゃの紹介の集大成。現場の保母さんがタオルやラーメンのあき容器、軍手などを使って作っているものを各園から集め、検討、改良して製作しなおした。

そしてもう一つは日常、園の内外で使われる保育に関する言葉の解説ミニ辞典の作製だ。「お母さんすわり」「犬食い」「ゴールデン・ケージ」「層期性嘔(おう)症」など、昔とちがい、複雑化している育児に関する情報ワードを、両親や周囲の人にも理解してもらおうというもので、これも保母さんらの協力を得て鋭意収集中。

平常は月一回、行事前になると週二回集まり、前日は半徹夜というエネルギッシュな活動だが、ママばかりでなくパパも育児に参加を、と呼びかけているだけあって、「自分たちの家族や子供もおろそかにはしない」という原則も忘れない。

「子供が好き。でもまあ、ぼくたち自身が仲良し少年クラブみたいなものでしょうね」と、若き園長さんたちはさわやかだ。